

## Ⅱ 「春の鳥」の文学教材としての問題点

滝 藤 満 義

### I はじめに

国語とは一体何を教える教科なのか。さらにその中で文学教育とは何を教えるものなのか。自明とも言えることが少しも明確でないところに、今日の国語教育の混乱があるように思われる。中等教育全般にわたる教科内容の再編成、教材の構造化が云々されている今日、国語教育の内部においては、先ずこの根本的な問題が明確にされなければならないであろう。

私は今から十年程前に中学において教育を受けた者である。その頃の国語教科書にあった文学教材を今日のに比較すると、一部重なり合うものを除いて、その多くが入れ代っている。ところでそれら捨てられた多くの作品が教材として不適当であることが確認されたためにそうなのであるか、それとも単に時勢に合わない古めかしいものというだけでそうなのであるかは、実に重大な問題に思われる。教材は即ち国語教育において何を教えるかという問題に対する最も有力な見解であるはずである。だとすれば一つの教材の取捨は国語教育の大問題でなければならない。戦後の二十年間だけに限っても、個々の文学教材について実に夥しい程の教材研究なり指導過程なりが公にされた。しかしそれらの研究、実践には果して適正な教材選択をめざす視点が十分備わっていたであろうか。与えられた教材をいかにこなすかという無批判な技術主義、指導過程論を体系化するのに都合のよい、いわば指導過程論のための教材論がなかったと言えるだろうか。私は以上のような素朴極る疑問から、自分の拙い実践を通して、その解決の糸口を探ってみることにした。

### Ⅱ 実践以前に考えられた問題点

本校で使っている教科書（筑摩書房版中2用）の文学教材に国木田独歩の「春の鳥」という作品がある。独歩の近代日本文学史における位置がそうであるように、この作品も文学教材中ではやや異色なもので、これが果して中学二年の教材として適当であるかどうかについて早くから私には関心があった。（因に、この作品は尙学図書版「現代国語」高二用のにも採られている。）私はこの作品の教材研究の段階で、小・中・高及び大学において文学教育を実践している人々を交えた会合で、教材としてみたこの作品について討議をすることができた。そこにおいて問題になった点を次

に述べてみたい。

先ず第一にリアリズムの欠如という点である。描写は大雑把で、たとえば白痴の姿などがリアルに描かれていない。現実をしっかりと見つめていない観念的・概念的描写になっている。少し立ち止って考えれば当然思い当たる白痴なら白痴なりの世界についての配慮は主人公（あるいは作者）の一方的な同情によってかき消されてしまっている。これを読む生徒達は主人公と共に白痴に同情し、同情するだけで自分とは別物としての白痴を見出すに止り、理解・認識という段階にまでは至らないに違いない。この作品においては虚構というものも、現代的リアリズムにおけるそれと違い、虚構を仮りて作者が自分の想いを述べるものであって、作者が人間の生きる現実をリアルにみつめ、その現実における人間性解放の可能性を虚構世界の構築において追究するというものではない。作者自身は虚構世界の構築によって苦悩し変革されて行くとは認めがたい。

以上問題になったような事柄は文学研究的な立場からこの作品の成立事情を考えてみても当然言えることであるが、これは後程改めて問題にしたい。

第二に、先のような問題点をかかえているとすれば、この作品を教材としてどう評価して行くかということである。現代的リアリズムの文学としては評価できないにしても、青年時代の気宇壮大を真剣に述べていたり、白痴教育に対する真剣な取り組みが述べられていたりすれば、いわば浪漫の香り高い小説ならば、それなりに感動を覚えるのであるが、それもこの作品では感じられない。又この小説の骨子をなす自然というものの感じ方についても、どうも透明でないという感をまぬがれない。だとすれば、どういう所を積極的に評価して、これを生徒達に教えるのか。白痴に対する一般の冷淡な態度などからして、主人公の白痴に対する態度及びその可能性の追究の姿は、作者独歩のヒューマニズムを感じとらせはしないか。又この作品のように半ば古典的な作品の場合、時代的制約を越えた可能性ということと共に、その時代における可能性を見出す評価も可能ではないか。しかし古典であろうとなかろうと、作品そのものは事柄やことばがやや古めかしいことを除けば、ほとんど無媒介で生徒の中に入って行く。文学史の問題を無視して、果してこのような作品の指導は可能であろうか。現代の小説とは作品そのも

## 「春の鳥」の文学教材としての問題点

の持っている方法が違うこのような小説を指導するに当って、指導方法の問題が別に考えられなければならないのではないか。

以上のような点から見て、この作品は結局教材として問題が残るというのが、討議の結論であった。このような問題点はすべて認めながらも、尙この作品に捨て難いものを感じていた私は、これを実際の授業において検討してみることにした。

尙筑摩書房版の教科書本文と原文とを校合してその異同を調べた結果、少しばかり問題にし得る改変は認められたが、ほぼ忠実に原作の姿を伝えているので、教科書本文をそのまま使うことに躊躇しなかった。改変された作品によって、その作品及び作者について云々することはできない。現行教科書において、編者による非文学的改変が少なからず行われているという事実が、特に低学年に行けば行くほどそれがはなはだしいという事実が、逆に私に面倒な検証を要求するのである。たとえば筑摩版における「春の鳥」における改変の一、二をみると、

児童→子ども 童なりけり→わらべなりけり  
男の児→男の子

(左が原文、右が教科書)

という一連の改変がある。教育的配慮による改変であると善意に解釈しても、このように改めることによって、独歩の童心趣味の表現が少しく阻害されてしまうことは確かである。又

名前は何と呼ぶの?→名前は何かと言うの?

というのがある。この小説には他に「名を六蔵と呼びまして」とか「姉をおしげと呼び」ということばがある。「言う」と「呼ぶ」とでは単にことばの新旧という以上に、作者の認識の問題にも深くかかわる違いがあると言わなければならない。言い続けて行けば結局文学における「ことば」の問題になって行くけれども、今は問題にしない。以上のような例を以て直ちに非文学的と断ずるのはさしひかえたいが、ともかくもこの作品はこの程度の改変で教材化されているわけである。

### III 実践を通じての考察

生徒の中で国木田独歩の作品を読んでいる者はクラスで一、二名しかいなかった。独歩の名前を聞くのさえ始めての者が半数以上いた。一度通読させてから書かせた感想文を検討してみると次のようなことがわかる。

先ず言えることは、ほとんどの者がある種の強い感動を受けていることである。今までに読んだものにはない新鮮なものを感じている。そして又ほとんどの者が主人公「わたし」とともに白痴の母子、六蔵及びそ

の母親に「あわれ」とか「かわいそう」とかの同情をおしみにく寄せている。

六という子はかわいそうである。それに鳥のまねをして死ぬ所などは、ふつうの子とはちがうのでかわいそうであり、その子を思う母はやっぱりかわいそうである。ぼくはこの文を読んで白痴でなくてよかったなあと思った。(男子)

今ことさらあどけない感想文をあげたが、生徒達の様々な感想文の大半も煎じつめて行けばこんな所に収束して行くのである。始めて身近に感じた白痴というもの、それに対する同情とともに、自分が白痴でなくてよかったという安堵感を持つのである。そこから更に社会あるいは自分達の今までの白痴に対する態度の反省へと行くものも多い。又白痴六蔵の心の清らかさ無邪気さにあこがれる者もわずかながらある。自分達がいかに世俗の塵にまみれて生きているかを説き、「白痴とは人間の一番自然な素直なありのままのすがたではないのか」とまで言うのである。更に白痴とは言え親子の情の切なるものがあるのに彼らは一様に感動している。主人公「わたし」を賞賛する感想も多い。「わたし」は自分達にはできないことをした、根気強いえらい人であるというのである。しかしごく少数ではあるが「わたし」に反撥を感じる者もいる。自分だったらもっと熱心に教育するだろう、何だか同情でごまかしているみたいだということである。その他六蔵が死んだ方が幸せだったかどうかということに妙に関心が集中したりもしている。又文章についてはやや古風であったためか、少々読みづらかったと見える。しかしこういう文章に異様な感動を覚えている者も二、三ある。

以上総じて感じられることは、成程生徒達の感動は大きかったかも知れないが、彼らはこの作品によって自ら深く考えることもせず、むしろ同情のもたらす一種のカタルシスに酔っているのではないかということである。これは夙に懸念されていたことではあったが、果してこの作品からはこういうものしか引き出せないのだろうか。

私はこの作品を指導するに当って、とかくありがたい、作品にないものまで教えるという危険を極力警戒したつもりである。時代・文学史等の知識は作品の表現に即して彼らに考えさせ、かつそれを援助する意味で簡単にこちらで解説を加えるという程度に止めた。たとえば、「昔の家老職」というようなことばは、当然生徒達に時代に対する想像を強いる筈だし、「都から来た年若い教師」ということばでも、時代を理解しないことには、そのことば自身の持つある種の浪漫性を汲みとれないものでもあるので、その都度説明を加えた。又「少年は天使です」というようなことばは、

かなり主題に密接にかかわるものでもあるし、生徒達も理解に苦しんだものでもあるので、「天使」ということばからキリスト教を思い出させ、明治前期のキリスト教、又それによって人間性に目ざめた青年群像、その一人としての独歩の青春などを簡単に説明するようにした。しかし明治という時代、あるいは日本の近代文学史等についての生徒達の知識は白紙に近い状態である。一つの小説を教えるという作業を通してこれらを教えるということは、作品の理解の上必須とは言え、非常に困難なことであると思ひ知らされたいわけにはいかない。

学習を通して生徒達の多くが抱くようになった疑問は、先ず「わたし」の同情は一方的ではないか、六蔵は「わたし」の同情とは関係なく自由ではないかということである。これは指導者自身が「わたし」の用語に「あわれ」とか「気の毒」とかが多いということに注意させた結果でもあろうが、このような結果は前から懸念されていた通りであった。その他「わたし」は「あわれ」をよく口にしますが、何か六蔵や母親を自分と差別しているようである。自分は白痴でなくてよかったという気持ちがあるのではないかと、自分達の気持ちに近付けて考える者も出てきた。又六蔵の自然児としての純粋さが「わたし」は羨ましいのではないかと、等々かなり本質にせまった意見も出てきた。これに生徒達の出した疑問は、それぞれの的を射たものであると言わないわけにはいかない。

学習のしめくりに書かせた二度目の感想文では、やはり以上のような疑点が反映していて、予想されたことではあったが「わたし」に対する否定的見解が多くなった。「わたし」の六蔵母子に対する同情はうすっぺらなものではない、ほんとうに白痴をあわれむ気持ちがあるのなら、もっと積極的に教育をしてもいいのではないかというのである。しかしこのような意見にゆすぶられながら、それでも「わたし」の行動は、世間一般の白痴に対する冷たい態度からして、これはこれでずいぶん立派ではないかと考える者もいる。更に積極的に、「わたし」の中に子供のような純粋さ、人間らしさを感じる者もいる。「わたし」に限らずこの作品に登場する人物たちの素直さ、人間らしさに心を動かされる者もいる。ある生徒は次のようにも言っている。

僕はこれを読んで、人間の弱さがなんとなくにじみ出て、どこにでもいる平凡な人間という、何か自然で「人間だなあ」と思う人間らしさが、何か残った。六蔵及びその母親にはやはり同情が集まる。そこから自分を含めた社会の白痴に対する態度を論じて行く者も多いが、それも観念的に、おぎなりに論じられているにすぎないのは、この作品の性格によるものであろう。又それとは別に、はじめと同様六蔵の中に自然児

としての純真さを見、実生活の塵にまみれた自分をそれに対置して、白痴六蔵を憧憬する者もいる。その他登場人物を包む美しい自然、古風な文体に感ずる者、又私が授業中に与えた片々たる文学史の知識に強い関心を示す者もわずかだがあった。

以上生徒達の主張する見解は、そのどれもがこの作品から読みとれるものには違はなく、一つのみを肯定し他を否定し得るというものではない筈である。だとすればどこにこの作品の主張を見定めて、これを指導すべきなのであろうか。「わたし」の人生観なり自然観なりをこの作品の一連の事件から主張するにしても、生徒達がそれぞれに見出した先のような見方をやはり認めた上でなければならぬであろう。とすれば実に透明度の低い主張になるといえないであろうか。結局指導者である私自身、これと言って積極的に生徒達に教える核心となるものを得られないままに終わってしまったというのが実情であった。

#### IV 検討及び結語

以上のような結果は、この作品を教材としてどのように評価させるのであろうか。生徒にリアルに現実を見る目を育てるといふ目的には、この作品はもとより答ええない。白痴を自分の姉に持つ一人の生徒は、明らかに作者のセンチメンタリズムを苦々しく思っている。そういう点では、この作品は一片の手記、あるいはルポルタージュにも及ばないであろう。この作品の作品たるゆえんは、そのセンチメンタリズムの中から生れて来るものにあるのであって、大多数の生徒達の感動の対象もそれをおいて外に考えられないであろう。この作品に独歩のヒューマニズムを感じ、清らかな人間、自然、又は人生の不思議を感ずるのは正しいであろう。しかしストレートに、あるいは確実にそれらを感じずには、この作品はあまりに雑音が多いといえないだろうか。その点、文学研究的な立場からこの作品の成立事情を検討しておくのも、あながち無駄なことでもないように思われる。

この小説は独歩も言う通り、彼の青春時代の体験に基くものである。佐伯時代の独歩の手記に「憐れなる児」というのがある。これは独歩の下宿先の白痴少年に関する手記で、明らかに「春の鳥」の素材になっているものである。これは、自然主義的な暗い環境と、白痴という暗い運命の両者におしひしがれて、常の少年らしい快活さもなく、全く生きるしかばねのごとき白痴少年に限りない同情を寄せているものである。これはロマンチストなりに独歩が現実と真正面に向き合っている姿を感じとらせるものである。

佐伯時代の独歩は又熱心なワーズワースンであった。常にワーズワース詩集を懐に、自然の中を歩き回

った。「春の鳥」にも引用されているワーズワースの詩“*There was a boy*”は独歩の評語を借りれば、

一人の童児が自然の懐より出で間もなく又自然の懐に返り去りたる哀痛の中に幽趣あり、幽趣の中に光明あるゾーズワース独特の詩題あり。

此詩を読む時は、実に人生を思ひ自然を思い、人間存在の神秘を思ひ、而して口にも言ひ難き深き慰藉を得、荒々しき絶望の血を静めて詩人をして地上の虚栄以外、別に静にして而も楽しく、楽しくして而も真実ある生活あるを感ぜしむ。

のごときものである。これは又これで独歩が青年時代真剣に思いつめたことと軌を一にするものである。

「春の鳥」はこの両者が七・八年を隔てた独歩の中年時代に及んで、なつかしく思い出された所に生れたと言え、あまりに図式化し過ぎるさらいはあるが、やはり当然考えられることであろう。その時、「憐れなる児」はワーズワース詩篇の少年と混同され、自然児としての六蔵となり、かつて「あわれ」と同情を寄せたものとは実体の違う、自然児としての白痴六蔵に「わたし」あるいは作者が「あわれ」を連発することになってしまったと考えられる。生徒達の指摘、たとえば「わたし」は六蔵がうらやましいのではないかという指摘も、こんな所に原因があるのではないだろうか。独歩の文学の一つの特徴である「思い出」性がこの作品でも如実に現われていると思わないわけにはいかない。ともかくもこれが独歩の積極的な前向きの作家活動の中から生れた作品であるとは言い難い。

国語教育の教材、さらにその中の文学教育の教材はどのようなものであるべきかを考える場合、どうしても教材を選定する基準が問題にならざるを得ないであろう。しかし今ここで私が幼い経験でもっていくつかの基準をならべたてたとしても、一体何になるだろう。いたずらに困乱を増大させるばかりである。ただ私は自分がともかく「春の鳥」という作品で実践し考えた範囲のことを言えばいいと思う。ところで今まで述べてきたことから、「春の鳥」が積極的な作品の主張をとらえにくい、換言すれば、指導者がこの教材によって何を教えたいのか、その焦点を定めにくい作品であるということは言ってもよいと思う。とすれば作品の主張がどういうものを教材とすべきかという、多分にイデオロギー的な議論をする以前に、既にこの作品は問題があるとは言えないだろうか。言うまでもないことだが、私は教材としての文学作品は文学としても価値の高いものでなければならぬと考えい

る。「春の鳥」が独歩の作品の中で最高に近い傑作であるという評価をする研究者もいる。しかし私はそうは考えない。すぐれた文学作品であるためには他にもいろいろ条件があるであろうが、その第一条件として、やはり作者が自分の生きる現実に正面から取り組んで行く姿勢の中から生れたものでなければならないと私は考えている。それがすぐれて現代的リアリズムの小説となるか浪漫的な作品になるかは別問題である。

教材としての文学作品は、ただその作品の主人公が子供達の年齢に近いとか、その作品が生徒達の興味をさそいそうであるとかの理由で生徒達に与えられてはいけない。さらに独歩の作品のように、中ば古典的な作品は文学史的な評価を無視しては教材の選定も不可能であろう。いかにも独歩らしい、独歩という作家の資質を最高に発揮した小説が「春の鳥」であるとは言いがたい。生徒達の感じた「人間らしさ」「素直さ」等々はすぐれて独歩的な、積極的な評価のできる独歩の資質であると私は考えるが、それも「春の鳥」において最高に発揮されているとは考えられない。

以上総じて結語めいたことを言うとするれば、私はこの「春の鳥」という作品の教材としての価値を積極的に評価できないということである。しかしこれは私の未熟な実践とやや性急な思考の結果であることも承知しているつもりである。この作品に対する私の読みとりは間違っているかも知れないし、又、指導過程に私はふれないで来たが、やはり教材の適正を云々するには指導過程もいろいろ工夫されなければならないだろう。又中学二年という学年もやはり考慮されなければならない。少くとも教材として生徒に教えるものとしての文学作品を考える場合、中学二年でも高校二年でも、やり方を変えればいいではないか、又受けとる方でもおのずからその理解の深さが違うのだからという、もっともらしい意見には賛成できない。それはそのどちらにおいても文学教育を放棄したことになるのではないか。特に文学史の問題のからむ作品は他の教材との関連も考慮されなければならないとすれば尙更である。

以上この作品の教材としての適正を云々するには、まだまだなされなければならない多くのことがある。非常に時間のかかることではあるけれども、ぜひなされなければならないし、又時間がかかるが故に、国語教育に従う者の緊密な協力が必要であるように思われる。